

(別記様式)

令和7年度 学校運営改善シート

学校名	筑波大学附属大塚特別支援学校	
	令和6年度	令和7年度
校長名	川間 健之介	小島 道生
幼児・児童・生徒数 (5月1日現在)	67	66
学級数	11	11

学校教育目標	1 知的障害のある幼児児童生徒に対し、幼稚部・小学部・中学部・高等部を設け、教育法規や一人一人の教育的ニーズに基づいた指導・支援を行う。〈根拠に基づいた教育〉 2 知的障害のある幼児児童生徒に対し、自立と社会参加に必要な資質・能力を培うため、適切な指導・支援を行う。〈自立と社会参加に向けた教育〉 【育てたい力】 ○人と共に様々な活動に参加する力を身につける。 ○主体的に生活に臨む力を身につける。 ○社会生活に必要な知識・技能や問題解決する力を身につける。
学校運営方針	本校は、変動する現代社会に不断に対応し、多様性や柔軟性のある新しい教育・研究に率先して携わっていく。それを実現するために、筑波大学附属学校群のミッションと3つの拠点構想（先導的教育拠点/国際教育拠点/教師教育拠点）を柱とした学校経営に取り組む。 1 知的障害教育を担う附属学校として、専門性の充実・発展、教育実践成果の発信に努める。 （【時代・革新】【多様性・インクル】【未来の共創】・研究開発学校） 2 附属学校として社会に貢献できる学校づくりを目指す。 （【時代・革新】【多様性・インクル】【グローバル・持続可能】【未来の共創】【幸福・安全】 多機関連携・カフェ店舗型教育施設「えがおカフェ」の活用） 3 大学・教育局・他の附属学校と連携し、大学の附属学校群として、今日的教育課題に対応する。 （【時代・革新】【多様性・インクル】【グローバル・持続可能】【未来の共創】【幸福・安全】）

附属学校群の ミッション	Designing Education for an Inclusive and Global Society (インクルーシブでグローバルな社会を実現するための教育をデザインする) (1) 時代を切り拓く教育のデザインと革新的な教育実践の追求 (2) 多様性を尊重しインクルーシブな社会を実現する人材の育成 (3) グローバルな視野をもち持続可能な社会を実現する人材の育成 (4) パートナリーシップによる未来の共創 (5) ウェルビーイングの向上と安全・安心・快適な環境の創出
-----------------	--

(別記様式)

学校名	筑波大学附属大塚特別支援学校
-----	----------------

【達成度】	Ⅳ・・・「目標を上回って実施している」 Ⅲ・・・「目標を十分に実施している」 Ⅱ・・・「目標を十分には実施していない」 Ⅰ・・・「目標を実施していない」
-------	---

分野	重点目標	具体的方策	自己評価			学校関係者評価
			重点目標に対する評価	達成度	課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
教育課程・学習指導	○現行学習指導要領に基づき、児童生徒一人一人の実態に応じた授業づくりを推進し、主体的に学ぶ力と社会参加・自立に向けた基礎的な資質・能力を育成する。 ○研究開発学校として、理科・社会・小学部生活科における先進的な実践を行い、知的障害教育の新たな在り方を創造・発信する。	・学習指導要領のねらいと児童生徒の実態を踏まえた単元計画を設定し、学習者の興味・関心に基づいた体験活動や課題解決型学習を取り入れ、主体性を引き出す授業を構築する。 ・研究開発の最終年次(4年目)として、これまでの研究成果をまとめ、次期学習指導要領改訂に資する資料として「学習指導要領(生活科・理科・社会科)草案」を作成する。また、知的障害特別支援学校における教科別の指導事例として、単元デザインから授業実践を発信する。	・現行学習指導要領に基づき、児童生徒の実態を踏まえた単元計画の見直しや体験活動・課題解決型学習を取り入れた授業づくりを進め、主体的に学ぶ力や社会参加・自立に向けた基礎的な資質・能力の育成を図った。 ・カリキュラム・マネジメントの視点から教育課程の改善にも取り組んだ。研究開発学校最終年次として、理科の専門家の助言を受けた教材開発や授業実践を行い、生活科・理科・社会科の実践整理と草案作成、指導事例の発信に取り組んだ。	Ⅲ	・単元レベルでの実践成果を学校全体の教育課程改善へとつなげ、継続的に検証していく仕組みの強化が課題である。今後は、教育活動の成果と課題を共有しながら循環するカリキュラム・マネジメントを一層推進し、教育課程の質的向上を図る。 ・研究開発学校の名目指定の1年延長を見据え、これまでの実践の体系的整理と成果の発信を進め、作成した草案や指導事例を校内外で活用することで、本校の教育実践のさらなる充実につなげていく。	研究開発学校として、児童生徒の実態に応じた授業づくりや生活との関連を重視した実践が進められており、特に理科等において専門性の高い取組が成果として現れている。人が変わっても一定水準の教育を維持できるカリキュラム・マネジメントの推進は高く評価できる。今後は、これまでの研究成果を校内外に継続的に発信し、他校でも活用可能な形での普及を期待する。
進路指導・生徒指導	○カフェ店舗型教育施設「えがおカフェ」などの職業学習の場を活用し、児童生徒の社会的・職業的自立に向けた力を育成する。 ○自己と他者の存在を尊重し合う意識を育み、いじめの未然防止と早期対応に努めるなど、安心・安全な学校生活の中で豊かな人間関係を築く力を育成する。	・「えがおカフェ」での体験を中心に、段階的な職場・就業体験(校外活動含む)へとつながるようなカリキュラムを整備する。 ・自己決定・自己表現の場を日常的に保障し、自己理解と他者理解を深める時間を意図的に設定する。いじめ防止については安全委員会(含むいじめ防止対策委員会)を設け、定期的に開催する。また、児童生徒の理解しやすい方法で学校生活に関するアンケートを実施し、実態の把握に努める。また、学校評価により取組の状況を客観的に確認し、改善につなげる。	・えがおカフェでの体験を核とした職業学習を推進し、接客や製菓、役割分担を通して働くことへの理解や社会参加に向けた意欲の育成を図った。あわせて、校外体験とも関連付けた段階的な進路学習を進めることができた。 ・日常の活動において自己表現や対話の機会を設定するとともに、安全委員会の開催やアンケートの実施に加え、中学部・高等部ではスクールカウンセラーによる全員面談を行うなど、いじめの未然防止に向けたきめ細やかな対応を進めた。	Ⅲ	・個々の進路希望や実態に応じた学習の充実を図るとともに、校内外の体験を系統的に結び付けた進路指導の整理が課題である。今後は、えがおカフェでの学びを基盤に校外実習や卒業後の生活支援との接続を明確化していく。 ・人間関係づくりやいじめ防止については、スクールカウンセラーによる面談やアンケート結果を継続的に活用し、早期把握・早期対応の体制を強化することで、児童生徒が安心して自己を表現できる学校環境の維持・向上に努める。	えがおカフェを核とした職業学習は、社会参加や働くことへの意欲を高める有効な取組として評価できる。進路指導については在籍年数に応じて理解が深まる傾向が見られるため、早期からの丁寧な情報提供や系統的な指導の充実が望まれる。また、スクールカウンセラーの活用等によるいじめ未然防止の取組は評価でき、引き続き安心して自己表現できる環境の維持が求められる。
保健管理・安全管理	○幼児児童生徒一人一人の健康状態を的確に把握し、日常的な健康管理と自己管理能力の育成を図る。 ○危機時の対応力を高め、安心・安全な学校環境づくりを推進する。	・学校安全衛生・保健給食マニュアルに則り、保健指導(スマイル等)を通じて、生活リズムや衛生習慣、感染症予防に関する自己管理意識の向上を図る。 ・危機管理マニュアルに則り、発達段階に応じた避難訓練を計画的に実施し、防災に対する知識と経験を増やせるようにする。	・幼児児童生徒一人一人の健康状態の把握に努め、保健指導や日常的な健康観察を通して基本的生活習慣や自己管理意識の育成を図った。感染症対策や事故防止に関する指導を継続した。 ・毎月の避難訓練を丁寧に実施し、非常時に備えた行動の理解を深めた。さらに、施設設備の安全点検を毎月確実に行い、教職員間で情報共有を図り安全な教育環境の維持に努めた。	Ⅲ	・健康管理や安全対策について計画的に実施できている一方で、児童生徒が自ら安全を意識し行動できる力の育成が課題である。 ・毎月の避難訓練や安全点検の結果を教職員間で共有し、実態に応じた改善を継続する。また、防災や生活安全に関する指導を日常の学習と関連付け、具体的な場面を想定した指導を通して主体的に判断・行動できる力の育成を図る。	日常的な健康管理や感染症対策、毎月の避難訓練や安全点検の実施など、安全・安心な学校環境の維持に向けた取組は適切に行われている。一方で、児童生徒自身が主体的に安全を判断し行動できる力の育成が今後の課題である。また、給食体制等については関係機関との連携を踏まえた円滑な対応の工夫が期待される。
組織運営	○11附属学校が共有する今日的課題(インクルーシブ教育・発達特性の理解など)に対し、特別支援学校の視点から提言・支援を行い、共通の解決策を提案する。 ○ICTツール(Teams、UTOS等)を活用し、校務の効率化と教職員間の情報共有を推進する。	・筑波大学の教育研究機関・教員と連携し、特別支援学校の実践知を活かして、11校共通の課題や授業づくり・支援の方法を共同で検討する。 ・Teams・UTOS・校内サーバの活用を通して、学校全体でカリキュラム・マネジメントに取り組むとともに、会議(議事次第の集約・議事録の共有等)の円滑な進行及び効率的な情報共有を図る。またこれらを通して、業務内容の可視化や適正な業務分担を推進し、職員一人一人の作業負担の軽減を目指す。	・附属学校群に共通するインクルーシブ教育や発達特性理解等の課題に対し、大学や他附属学校との連携を図りながら研究協議や授業交流を進め、本校の実践知の共有と相互理解の深化を図った。 ・校内ではツールを用いて教員間の連携や情報共有を意識した組織運営を進め、研究開発学校の取組や教育活動の円滑な推進につなげた。さらに、会議や校内研修を通して共通理解の形成に努め、協働的に課題解決に取り組む組織体制の充実を図った。	Ⅲ	・附属学校群や大学との連携を通して実践交流を進めてきたが、得られた知見を校内外で体系的に共有し、継続的な改善へとつなげる仕組みの強化が課題である。 ・研究協議や授業交流の成果を記録・整理し、校内研修や分掌間での共有を図ることで組織的な学びを深める。また、研究開発学校の成果も踏まえ、附属学校群との連携を一層推進し、協働的に課題解決に取り組む持続可能な組織体制の充実を図る。	大学や附属学校群との連携を通して、インクルーシブ教育や発達特性理解に関する実践交流が進められている点は評価できる。特別支援学校としての知見を他校へ還元する役割も期待される。一方で、得られた成果を組織的に整理・共有し、継続的な改善につなげる仕組みの強化が必要である。また、教職員の負担軽減やメンタルヘルスへの配慮も重要である。
その他	○地域に開かれたカフェの運営を通して、卒業後の移行支援と社会貢献の在り方を試行・推進する。 ○企業との連携により、障害のある生徒のキャリア形成を支えるモデル的な取組を創出・発信する。	・学校が主導し、卒業後の就労支援・社会参加のステップとなる機能を持たせた仕組みを試行的に構築する。 ・本校での実践をモデル化し、今後の特別支援教育と就労支援のあり方について発信していく。	・地域に開かれたえがおカフェの運営を通して、高等部生徒や卒業生が役割を担いながら働く経験を積む機会を確保し、社会参加や自立に向けた学びを推進した。 ・カフェを拠点とした交流や情報発信を通して、本校の教育実践への理解促進と教育活動としての職業学習と社会との接点を広げることができた。	Ⅲ	・えがおカフェを核とした取組を継続的な教育活動として発展させるためには、運営体制や役割分担の整理と持続可能な仕組みづくりが課題である。 ・活動の成果や課題を整理し校内外へ発信することで理解者を広げ、卒業後の移行支援や社会参加を支える拠点としての充実を図る。	えがおカフェの運営は、地域に開かれた教育活動として社会参加や就労につながる有意義な取組であり高く評価できる。一方で、地域住民や一般家庭への認知は十分とは言えず、SNSや広報の工夫による情報発信の充実が求められる。また、寄附や企業連携の仕組みづくりなど、活動を持続・発展させるための基盤整備についても検討が期待される。